

# ダニエル書 - 第百五号

福音の段階的拒絶：キリストの降誕からステパノの石打ちまで

Jeff Pippenger

2024-02-29

前回の記事では、靈感によれば、ユダヤ人は十字架において福音の「拒絶を確定させ」、その後ステパノの石打ちのときに再びその拒絶を確認した、と述べました。どうしてそのようなことがあり得るのでしょうか。もちろん、当時あれこれ難癖をつけていたユダヤ人による福音の拒絶は、段階的に進行したのです。彼らはすでに、キリストの誕生の時点で見過ごされていました。キリストの誕生からステパノの石打ちに至るまでの出来事は、福音の段階的な拒絶を示しています。

人々はそれを知らないが、その知らせは天を喜びで満たしている。光の世界からの聖なる者たちは、より深く、よりやさしい思いをもって地上へと引き寄せられている。その御臨在のゆえに、全世界はいっそう明るさを増している。ベツレヘムの丘々の上には、数えきれないほどの天使の群れが集められている。彼らは、この喜ばしい知らせを世界に告げる合図を待っている。もしイスラエルの指導者たちが託された務めに忠実であったなら、イエスの誕生を告げ知らせる喜びにあずかることができただろう。だが今、彼らは差し置かれてしまった。『The Desire of Ages』 47.

イエスの誕生からステパノの死に至るまで、古代イスラエルによる福音の段階的な拒絶が例証されている。ユダヤ人によるキリストの拒絶が段階的であったと認めるなら、「彼らの拒絶の確定」を、神殿の垂れ幕が裂かれた十字架のときとステパノの死のときの双方に見いだすことができる。垂れ幕が裂けたことは、彼らがもはや神の契約の民ではないことの象徴であり、ステパノが石打ちにされたとき、彼は神の右に立っておられるイエスを見たが、これはダニエル書十二章一節において猶予期間の終結を象徴するものである。エルサレムの滅亡もまた、猶予期間の終結の象徴である。

エルサレムに臨もうとしている裁きは、ほんの短い間しか遅らせることができなかった。滅びの定めにあるこの都にキリストのまなざしが注がれたとき、彼が見たのは単にその滅亡だけではなく、世界の滅亡であった。エルサレムが滅びに引き渡されたように、世界もまた自らの破滅に引き渡されることを、彼は見た。彼は、神に敵対する者たちに下される裁きを見た。エルサレムの滅亡のときに起こった光景は、主の大いなる恐るべき日に、しかしさらに恐ろしいありさまで、繰り返されるであろう。レビュー・アンド・ヘラルド、1897年12月7日。

エルサレムが十字架のときに滅ぼされるのを防いだのは、ただ神のあわれみだけだった。

ユダヤ人によるキリストの磔刑には、エルサレムの滅亡が伴っていた。カルバリーで流された血は、この世でも来るべき世でも彼らを破滅へと沈めた重石であった。神の恵みを退ける者たちの上に裁きが下る大いなる終わりの日にも、同様になるだろう。彼らのつまずきの石であるキリストは、その時、復讐の山として彼らに現れるだろう。義人には命であるその御顔の栄光が、悪しき者には焼き尽くす火となる。退けられた愛、侮られた恵みのゆえに、罪人は滅ぼされる。時代の望み、600.

十字架の時にエルサレムの滅びがもたらされるのを引き止めていたのは、ただ神の憐れみだけだった。

キリストご自身によってエルサレムの滅びが宣告されてから四十年近くの間、主はその都と国への裁きを遅らせた。神はご自分の福音を拒む者たちと御子を殺した者たちに対して、驚くべき長い忍耐を示された。大いなる論争、27。

最後の宮清めの時、イエスは、預言者ダニエルによって語られた「荒らす憎むべきもの」を弟子たちが見るときにはエルサレムから逃げるよう、警告を与えられた。最初に宮清めをされたときには、ユダヤ人が御父の家を強盗の巣にしてしまったと述べられたが、最後のときには「あなたがたの家は見捨てられて荒れ果てる」と言われた。まさに行われようとしていた十字架刑の前でさえ、十字架刑の時に垂れ幕が裂かれるはずのその神殿は、すでに神の家ではなくユダヤ人の家であるとされていた。ホワイト姉妹は、キリストがその宣言をなさった時期について述べており、彼女の証言が進むにつれて、延長された憐れみの四十年についても言及している。

祭司や指導者たちに向けられたキリストの言葉「見よ、あなたがたの家は見捨てられて荒れ果てる」（マタイ23:38）は、彼らの心に恐怖を与えた。彼らは無関心を装ったが、これらの言葉の意味は何かという疑問が、心の中で絶えず湧き上がった。目に見えない危険が彼らを脅かしているように思われた。国の誇りであるあの壮麗な神殿が、まもなく瓦礫の山と化してしまうということなのだろうか……

キリストは弟子たちに、エルサレムに来たるべき滅びのしるしを示し、またどのように逃れるべきかを教えられた。「あなたがたがエルサレムが軍勢に囲まれるのを見たなら、その荒廃が近いことを知りなさい。そのとき、ユダヤにいる者たちは山へ逃げよ。都のただ中にいる者たちはそこから出て行き、地方にいる者たちはそこに入ってはならない。これは、書かれているすべてのことが成就するための報復の日々だからである。」この警告は、四十年後のエルサレム滅亡の際に守られるために与えられた。キリスト者たちはその警告に従い、都が陥落したとき、キリスト者で命を落とした者は一人もいなかった。The Desire of Ages, 628, 630.

キリストは31年に十字架にかけられ、そのほぼ40年後の70年に、エルサレムは三年半にわたる包囲の末に滅ぼされた。では、ダニエル書9章24節で七十週として示されている猶予期間がなお三年半残っていたのなら、31年の十字架の時にエルサレムが滅ぼされたとはどうして言えるのか。こうした一見矛盾する点は、どのように解決できるのか。最も簡単な解決は、七十週で表されている猶予期間の終結について、それが段階的な猶予の終結であると理解すべきだという事実を確認することである。これは正しいが、その歴史の道しるべを適用する際には、預言的な具体性が失われてしまう。説明してみよう。

もしペンテコステが、バビロンにいるほかの群れが呼び出される、間もなく来る日曜法を表しているのだとしたら、なぜ福音が異邦人に及んだのはペンテコステの三年半後だったのでしょうか。キリストの死、あるいはステパノの殉教は、古代イスラエルの恩恵期間の終結のしるしなのでしょう。ラオデキヤ的アドベンチズムが間もなく来る日曜法の時に教会であることをやめるのなら、紀元70年の神殿破壊は、日曜法におけるラオデキヤ的アドベンチズムの神殿の終わりを表していたのでしょうか。一見矛盾しているように

思われることは、「line upon line」の適用によって解決され、その適用がなされると、私たちが特定している道標の証言は非常に明確で簡潔になります。

キリストが契約を確証した一週間は、三年半ずつの二つの等しい期間に分けられている。最初の三年半はキリストの洗礼から始まり、キリストの死で終わる。洗礼はキリストの死と復活の象徴である。したがって、その三年半の始まりは終わりとも一致している。その期間、キリストは福音をもっぱらユダヤ人に宣べ伝えた。その三年半の終わりは、続く三年半の始まりとなる。第二の三年半はキリストの死から始まり、ステパノの死で終わる。その期間、弟子たちは福音をもっぱらユダヤ人に宣べ伝えた。

別々の預言的な筋道であるその二つの期間は、「行に行」として重ね合わせられるべきである。始まりも終わりもアルファとオメガの印を帯びている。なぜなら、始まりの歴史と終わりの歴史は同じだからである。両方の期間の長さも同一であり、各期間において行われる働きも同一である。初めであり終わりであるキリストは万物の創造者でもあり、その意味で真理の創造者でもある。ヘブライ語の「真理」という語は、三つのヘブライ文字によって構成されている。ヘブライ語のアルファベットの第一の文字、続いて第十三の文字、そして最後の文字が組み合わされて、ヘブライ語の「真理」という語ができています。

二つの三年半の期間はいずれも、初めも終わりもキリストである。すなわち、第一の期間の初めは彼の洗礼、同じくその終わりは彼の死である。また、第二の期間の初めは彼の死であり、その終わりにはキリストは神の右に立っておられる。十三という数字は反逆の象徴であり、第一の期間にはキリストご自身が、第二の期間にはその弟子たちが福音を告げたにもかかわらず、詭弁を弄するユダヤ人たちは、両方の期間において福音のメッセージに反逆した。

両方の期間は同じ長さであり、アルファとオメガのしるしを帯び、同じ福音のメッセージを示している。これら二つの期間は“line upon line”によって重ね合わせられるべきである。“line upon line”という方法論は、後の雨における試しの方法論である。それは終わりの時代の方法論であり、終わりの時代にその方法論によって見いだされ確立される真理こそが、十四万四千人が封印される際にレビの子らを精錬し、清めるのである。

彼は誰に知識を教えるのか。誰に教えを悟らせるのか。乳離れした者たち、乳房から離された者たちに。というのは、戒めに戒めを、戒めに戒めを、定めに定めを、定めに定めを、ここに少し、そこに少しだからである。

なぜなら、どもる唇と異なる言葉をもって、彼はこの民に語られるからである。彼らに向かってこう言われた。「これが、疲れた者を休ませる安息である。これが、憩いである。」しかし彼らは聞こうとしなかった。だが主の言葉は彼らには、戒めに戒めを、戒めに戒めを、定めに定めを、定めに定めを、ここに少し、そこに少しとなった。彼らが行って後ろに倒れ、砕かれ、畏にかかり、捕らえられるためであった。

イザヤ書 28:9-13

イザヤ書の次の節は、エルサレムの民を治める嘲る者たちに語りかけている。彼ら嘲る者たちにとって、彼らが「聞く」ことを拒んだ「安息と憩い」（後の雨）は、彼らをして「行き、後ろに倒れ、砕かれ、畏にかかり、捕らえられる」原因となる。その試練は別の

舌（言語）によって彼らに与えられた、というのも、エリヤ、バプテスマのヨハネ、ウィリアム・ミラーは、それぞれの時代の神学学校で訓練を受けていなかったからである。ラオデキヤ的なアドベンチズムを試す後の雨のメッセージとは、「行に行を重ねる」の適用によって生み出されるメッセージである。

キリストが契約を確証されたその週の前半三年半を後半の三年半に重ね合わせると、探求心ある者の心に生じうる見かけ上の矛盾を明らかにする預言的な光が見えてきます。その週は、契約の使者が契約を確証する時であり、聖書における契約は血によって確証されなければなりません。キリストのバプテスマと十字架刑、そしてステパノの石打ちは、いずれも血を指し示しています。二本の線はいずれも契約の血を表しており、その線が契約を確証しているのです。

「line upon line」で重ね合わせると、洗礼と十字架刑が最初の道標となり、十字架刑とステパノの石打ちが最後の道標となる。一つの線にまとめると、十字架と、ステパノの死の際のミカエルの立ち上がり、ユダヤ人の福音拒否を確証する二人の証人となる。二つの線を組み合わせると、キリストの死はその弟子ステパノの死でもあり、それは過越である。三日後、キリストは初穂の捧げ物として復活する。

しかし今や、キリストは死者の中からよみがえり、眠った者たちの初穂となられた。コリント人への手紙第一 15章20節。

過越の祭りと三日目の初穂の祭りとの間に、種入れぬパンの祭りの始まりがある。種入れぬパンは「ふくらむ」ことがなく、キリストも二日目には復活せず、三日目に復活された。「line upon line」の適用において、キリストとステパノは共に死ぬが、初穂の復活には順序があるので、ステパノが復活するのはキリストの後である。

しかし、各人はそれぞれの順序であって、初穂はキリスト、次いで、キリストの来臨のときにキリストに属する者たちである。コリント人への第一の手紙 15:22。

春の祭りは相互に切り離せない。直接結びついているからである。この意味で、ペンテコステは間もなく到来する日曜法を表しており、その時には聖霊の注ぎが再び起こり、黙示録18章の第二の声、現在福音を知らない人々にバビロンから出てくるよう呼びかけるだろう。「バビロン」という語は「バベル」に由来し、それは混乱を意味する。というのも、バベルの崩壊の時に神が諸言語を混乱させたからであり、世界に福音を伝えるために神が言語の混乱を覆したのはペンテコステにおいてであった。こうしてペンテコステと日曜法は一致する。

五旬節に弟子たちには諸言語を話す賜物が与えられたが、その時点で彼らのメッセージはなおユダヤ人に限定されていた。両者を合わせて考えると、五旬節は西暦34年に当たり、そのときステパノが石打ちにされ、そして福音はその後、まだ福音を知らない人々のもとへ運ばれた。

ステパノは、「主の来臨のときに」よみがえらされるが、主と共に死んだ者たちを代表している。初穂のささげ物は、三日目のキリストの復活を示すとともに、七週の祭り、すなわち五旬節の始まりをも示しており、五旬節はシナイで十戒が授けられたことを記念している。

1844年10月22日は十字架と符合する. というのも、他の証拠の中でもホワイト姉妹は、十字架の後に弟子たちが味わった失望を、1844年10月22日の後に続いた失望と対応させているからである. 十字架も1844年10月22日も、やがて到来する日曜法を予表している. ペンテコステもまたやがて来る日曜法を象徴しているが、ペンテコステは十字架の五十二日後に来た. 過越祭によって予表されていた十字架は、死の天使がエジプトを過ぎ越したその夜から律法の授与に至るまで、古代イスラエルの古き道筋を記念する一連の祭りの幕開けとなる. これらの祭りはそれぞれに固有の特色を持っているが、互いに切り離せない形で結びついている. ゆえに、過越祭からペンテコステまでの全五十二日間を単一の道標として適用するのは正確である.

このため、十字架、ステパノの殉教、そしてペンテコステは皆、まもなく到来する「日曜法」を予表している. その時、すなわち黙示録18章の第二の声が神のほかの群れをバビロンから呼び出し始めるときに、現代バビロンに対する漸進的な執行審判が開始される. その道標において、エルサレムに対する執行審判が到来した. ただし、神はあわれみにより、神殿と都の実際の破壊を十字架の後ほぼ四十年、すなわち紀元70年まで延期された. 古代エルサレムの破壊は、合衆国で「国家的背教の後には国家的破滅が続く」ときに始まる、漸進的な執行審判の始まりを表している.

真理は二人の証言によって確立される. そして、キリストが契約を堅くされた三年半の二つの期間において、間もなく来る日曜法を特定する歴史に結びついた死と復活についての二人の証人を見出す. 黙示録十一章におけるその日曜法は「大地震の時」とされている. その「時」は、三年半にわたり証言した二人の証人と直接結びついている. 彼らの証言は彼らの死と復活で終わる.

彼らの三年半にわたる証しと、それに続く死と復活は、イエスとスティーブン双方の死と復活によって象徴されてきた. なぜなら、「line upon line」により、スティーブンはキリストと共によみがえった者として表されているからである. 初穂の祭りでは、二つの主要な供え物がささげられた.

一つは傷のない子羊で、もう一つは大麦の捧げ物であった. 大麦は後に続く収穫を表し、子羊はキリストを表していた. キリストは三日目に復活された. ステパノは後に続く者たちを表しており、大麦は後に続く収穫を表していた. 黙示録11章の二人の証人は三年半のあいだ証しをし、その後殺され、三日半の後に復活した. その二人の証人は、初穂であるキリストにかたどられていた. というのも、彼らはまた初穂である十四万四千人を表しているからである.

私は見た. すると、小羊がシオンの山に立っており、彼とともに十四万四千人がいて、彼らの額には小羊の父の名が記されていた. 私は天からの声を聞いた. それは多くの水のとどろきのようにあり、また大いなる雷鳴のようであった. 私はまた、豎琴弾きたちが豎琴を奏でる声を聞いた. 彼らは御座の前で、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌を歌った. その歌を学ぶことができたのは、地から贖い出された十四万四千人のほかにはだれもいなかった. 彼らは女によって汚されなかった者たちで、純潔な者たちである. 小羊がどこへ行かれても、彼らは従って行く. 彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられる初穂となった. 彼らの口には偽りが見いだされず、神の御座の前で傷のない者たちである. ヨハネの黙示録 14:1-5

初穂の祭りにおける大麦のささげ物は、その後続く収穫を象徴していた。そして、西暦34年のステパノは西暦31年のキリストの死に続いたが、「line upon line」でありながら、彼らは同じ道標において死んだ。初穂のささげ物との関連で言えば、キリストはほふられた小羊であり、ステパノは大麦であった。パウロによれば、「キリストは眠った者たちの初穂」であり、そして「その後、来臨のときにキリストのものとなっている者たちが続く」。十四万四千人は初穂であり、彼らは「小羊がどこへ行こうとも従う者たち」である。

黙示録第十一章の「大地震」の「時」に、三年半預言してきた二人の証人は殺され、三日半のあいだ街の通りに横たわるが、よみがえらされる。彼らは、預言的にイエスと共に、またイエスの後にも復活したとされるステパノに象徴される者たちである。したがって、底なしの穴から上ってきた獣に殺されてから「三日半」後に、彼らは復活する。彼らが復活するその同じ「時」に、彼らは旗印として天に昇る。彼らの復活と昇天の過程は、神の預言のことばの中に注意深く示されており、そこには、ステパノの文字どおりの死によって彼らが型どられていることも含まれている。すなわち、第三の天使のラオディキアの運動から第三の天使のフィラデルフィアの運動へと変えられる過程において、二人の証人において成し遂げられる霊的な死を表している。

次回の記事でこの研究を続けます。

ただ一つ確かなことは、サタンの旗印の下に立つセブンスデー・アドベンチストは、まず、神の霊の証しに含まれている警告と戒めを信じる信仰を捨てるということだ。

より深い献身と、いっそう聖なる奉仕への召しが発せられており、今後も発せられ続ける。今、サタンの示唆を口にして人々の中には、やがて我に返る者もいる。信頼を託された要職にありながら、この時のための真理を理解していない者たちがいる。彼らにこそ、そのメッセージを伝えなければならない。彼らがそれを受け入れるなら、キリストは彼らを受け入れ、ご自身と共に働く者とする。しかし、そのメッセージを聞くことを拒むなら、彼らは暗黒の君の黒旗の下に立つことになる。

私は、この時のための尊い真理が人の心にますます明確に開かれている、と告げるよう指示を受けています。特別な意味において、男女はキリストの肉を食べ、その血を飲むべきです。真理は絶えず拡大し得るので、理解は発展していくでしょう。真理の源である神は、彼を知ろうと追い求める者たちと、ますます親しい交わりに入ってください。神の民が天からのパンとして神の言葉を受けるとき、彼の出現は暁のように確かであることを知るでしょう。人が食物を食べて肉体の力を得るように、彼らは霊的な力を受けるのです。

私たちは、主がイスラエルの子らをエジプトの奴隷の身から連れ出し、荒野を通過してカナンへ導いたご計画を、半分も理解していない。

福音から輝き出る神の光を集めるなら、私たちはユダヤの制度をいっそう明確に洞察し、その重要な真理をより深く理解するようになるだろう。私たちの真理の探求はまだ完成していない。私たちはほんのわずかな光の筋を拾い集めただけである。日々御言葉を学ぶ者でないなら、ユダヤの制度の諸問題を解き明かすことはできない。彼らは神殿の奉仕によって教えられている真理を理解することはできない。神の偉大なご計

画を世俗的に理解することが、神の働きを妨げている。雲の柱に包まれておられたキリストがその民に与えられた律法の意味は、来るべき世で明らかにされるだろう。Spalding and Magan, 305, 306.